

常楽寺 不動堂の歴史をさぐる

今から九百八年前の天仁元年、私達の住む上野の国一帯は、浅間山の大噴火で火山灰が降り注ぎ、田畑を埋め尽くし、家屋や田畑は壊滅的な被害を受け、多くの人々が、命を失い、生活の場を失い、荒廃した原野となりました。

この時代より、さかのぼると三百十四年前、延暦十三年(西暦七九四年)、都を「長岡京」から「平安京」に移し、中央の文化が開いた「平安時代」を迎えていきましたが、この、約四百年続いた、平安時代の後期に、私達の住む群馬東国は、戦乱が続き、また火山灰に埋もれて、都の人達からは「亡弊の国」と呼ばれていたといえます。

この時、源氏の頭領、八幡太郎義家の三男、「源義重」が、この地を切開き、豊かな田畑を手にして、自分の私有地とした「荘園」を広げ、この地を支配して行きました。

江田氏や、由良氏、藤原氏、岩松氏、村田氏等と共に、新田の一族として、歴史の上に登場した、「田島氏」は、どのような人物で、どのような活躍をしたのか、今は、まったく不明ですが。

新田界限の中では、最も古い時代となる平安時代の後期に、常楽寺が建立され、平安時代のすぐ後に続く、鎌倉時代の特徴を残す、立派な石塔群

日養供総祖洗
3月21日(金春分の日)
午前10時より 本堂
不動尊修復展 3月21日~4月10日

不動堂の完成も、お不動様の修復も、まもなく終了しますが、例年実施しています。「先祖総供養法要」は、三月二十一日(金曜日)春分の日 国民の休日 午前十時より、常楽寺本堂で厳修致します。
きれいに修復の終わった、お不動尊様は、三月二十一日、「先祖総供養の日」から、四月十日(木曜日)まで、修復の流れを記録した

源の義重は、新田の頭領として、「新田氏の祖」として、勢力をのびし、荘園を基盤にした、豊かな経済力で、一族に土地を分配して、大きな武士集団を築いて行きました。

今日の上田島町、中根町、下田島町地域を、田島郷として治めたのが、「田島氏」だったと考えられますが、その「田島氏の菩提寺」として建立されたのが、「常楽寺」だったと思われまます。

この平安時代、中央では真言宗を広めた空海(弘法大師)が活躍され、平安時代の後期には、疲弊しつつあった真言宗を、大きく復興、発展させた寛朝(かろ)は、僧正(興教大師)が活躍し、全国に信者を広めた時代です。

常楽寺の本尊は、この時代、平安時代の後期に像造され、祭られたもので、新田一族の豊かな経済力に支えられて、寺が建立されたと思います。

を、数多く残した「先祖」が、「この地に居住していた事」には間違いありません。

今、再建している不動堂も、この時代に建立されたのかは不明ですが、祭られている「なみきり不動尊」は、全国的に見ても数すくなくない尊像で、「この常楽寺に、どうして祭られたのか不思議です。」

この解明に、皆さんも挑んでみませんか。

写真と共に、「つすさま明堂」に展示して、皆さんに公開します。是非大勢の皆さんに見ていただきたいと思ひます。

今回、修復された「なみきり不動」と呼ばれるお不動様は、弘法大師様が中国からの帰国の途中、舟が難破しかかったとき、一刀三礼して、海の安全を祈願されて彫られると、お不動様の右手に持った「智剣」で浪を切り裂いて、舟の安全を守ったとされる、伝説のお不動様です。なお、不動堂の落慶法要は四月二十八日を予定しています。

常楽寺
だより
平成26年
2月26日